

人類学と開発研究 : 「障害と開発」研究との対話

亀井, 伸孝
愛知県立大学

<https://doi.org/10.15017/2344491>

出版情報 : 九州人類学会報. 38, pp.89-94, 2011-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



人類学と開発研究 —「障害と開発」研究との対話—

亀井 伸孝 (愛知県立大学)

キーワード: 「障害と開発」研究、生態人類学、身体の差異、
自文化人類学、雇われ人類学者

I. はじめに

文化人類学者が、異分野・異なるテーマと出会う経験は、「相手の分野に何らかの貢献をする」だけでなく、新しい民族誌の可能性をもたらすという意味で、「文化人類学それ自体を豊かにする」ことができる、またとないチャンスである。

筆者は、2005-2009年の4年間にわたり、日本貿易振興機構アジア経済研究所の「障害と開発」をテーマとしたふたつの共同研究に関わる機会を得た。開発研究における新たな方法論を提言するとともに、並行して、人類学における新しい民族誌のあり方を模索してきた。

本論では、筆者の4年間におよぶ共同研究への関与を総括しつつ、「参与観察という調査法がマイノリティの人間開発研究に寄与した面」と、「それを通してかえって文化人類学の側が得ることができた示唆の面」の双方を紹介しつつ、新たな民族誌の領域を開拓するための戦略について検討したい¹⁾。

II. アジア経済研究所の共同研究

1 「障害と開発」研究への参加

筆者は、1997年から西・中部アフリカ諸国で、ろう者コミュニティと手話言語に関する研究にたずさわってきた。第一義的には、現地のろう者コミュニティにおいて共有されている言語と文化を、フィールドワークを通じて明らかにし、それらに関する民族誌的記述を行うという、

狭義の文化人類学的な営みである [亀井 2006 ほか]。

一方、これらの調査の成果に関連づけるかたちで、「障害と開発」をテーマとする国際開発の共同研究への参加の依頼を受け、成果や手法を開発研究に応用することを要請された。

「障害と開発」は、最近、急速にその存在感を増している国際開発の研究／実践の一分野である [森編 2008; 2010 ほか]。近年では、人間開発の概念の普及に伴い、開発途上国の女性 [NUSSBAUM 2000=2005] や言語的・文化的マイノリティ [UNITED NATIONS DEVELOPMENT PROGRAMME 2004=2004] など、対象社会の中におけるさまざまな差異に敏感な開発研究／実践が取り込まれる傾向が見られる。そのような潮流の中で、途上国の障害をもつ人びとも、開発の議論の中に位置づけられるべきであるとの認識が生じた。

このような認識に加えて、「障害が貧困を生み、貧困が障害を生む」という正のフィードバックが存在していることも指摘されており [森編 2008]、障害の問題を避けては貧困削減全般を論じることはできないとの認識も浸透しつつある。これらの背景とともに、「障害と開発」は、国際開発の全体像に影響を与えうる重要な領域として注目が集まっている。

人類学と国際開発研究／実践とがクロスする領域に着目することは、かねてから行われているが [NOLAN 2002=2007 ほか]、「障害と開発」をめぐるはこの種

の議論が行われたことはなかった。人類学と他領域との接点で、視点や方法をめぐる豊かな相互作用が得られたこの経験を紹介することは、人類学で他領域を豊かにするだけでなく、人類学自体を豊かにするヒントとなるであろう。

2 共同研究「開発問題と福祉問題の相互接近」

4年間(2005-2009年)にわたり、日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究会委員として、ふたつの共同研究に参加する機会をもった。

ひとつ目の共同研究「開発問題と福祉問題の相互接近: 障害を中心に」(2005年4月-2007年3月、主査: 森壮也)は、その目的を以下のように示している。

「開発途上国の貧困問題の解決のためには、貧困者の中で20%から30%を占めると言われる身体障害者の問題の解決は不可避である。」

「こうした問題に対し、福祉・慈善的なアプローチではなく開発アプローチの観点から取り組んでいくことは現在、喫緊の問題であり、それに資する研究を以下のような社会科学的観点から行う。」

「開発途上国の障害者についてのアプローチの整理と問題点—世界的な障害観の医学モデル(障害は個人の問題で治療すべきものである)から社会モデル(障害は社会がそれに対応していないことから問題となるのであって、社会的な問題であり、社会の側での変革も必要とされる)への転換の動きと開発途上国での実践に与える影響を分析する。」[日本貿易振興機構アジア経済研究所 2006]

ここでは、障害観をめぐる医療モデルから社会モデルへの転換がうたわれている。「医療モデル」とは、「個人の身体の中」に障害の要因を発見し、それらを除去、軽減することを志向する障害観であ

る。そこでは、治療やリハビリテーション、予防などを講じることが想定されている。

一方の「社会モデル」は、「個人を取り巻く環境の中」に障害の要因を発見し、それらを除去、軽減することを志向する障害観である。医療モデルとは異なり、バリアフリーや情報保障などを講じることが検討される。社会環境の中にこそ存在する障害を明らかにするとともに、障害をもつ個人／集団におけるよりよい資源利用と環境適応のあり方を提言しようとするものである。

従って、「障害の社会モデル」の発想に根ざした国際開発とは、障害をもつ人びと自体を疎外してしまう「障害の撲滅」の発想ではなく、障害をもつ人びと自身が人間開発に主体的に関与していける方途を考えるという発想に立っている。

3 共同研究「障害者の貧困削減」

ふたつ目の共同研究「障害者の貧困削減: 開発途上国の障害者の生計」(2007年4月-2009年3月、主査: 森壮也)は、その目的を以下のように示している。

「各国の政策の具体的提案の前提となるデータについては、センサスの中での取り組みも含め、まだ不十分な状況にある。貧困層も多い障害者全般の生活の実態はその生計の様子、就労状況を含め、その実態は詳らかとなっていない。」

「本研究は、これら従来の問題を克服できるデータの構築・分析を目指す。またこのデータによる障害者家計における就業者や貧困状況の把握、および生活実態の把握を行う。」[日本貿易振興機構アジア経済研究所 2008]

ひとつ目の共同研究で確認された視座、つまり、障害に関与する国際開発は、医療モデルによる障害の撲滅を目指すのではなく、社会モデルによる環境の改善を

目指すという方針に基づいて、具体的な実態調査を行い、データに基づいた議論を行うことを目指したのが、ふたつ目の共同研究であった。

Ⅲ. 成果：「障害と開発」研究における生態人類学の応用

1 生態人類学と「障害の社会モデル」の類似性

アジア経済研究所の共同研究で求められていたことは、障害をもつ個人を取りまく環境の調査をし、それに関わる定量的なデータを収集することであった。これは、生態人類学の視点・手法と酷似していることが分かった。

生態人類学とは、人間集団と環境の関係を明らかにすることを目的とする人類学の一領域である。おもに、狩猟採集民、農耕民、牧畜民など、伝統的な生業集団の調査を中心に、世界各地のフィールドで研究が行われてきた。生態人類学では、これらの人びとの資源利用の実態を明らかにし、環境への適応のあり方を記載しようとする。

この視点と方法は、そのまま「障害の社会モデル」に根ざした開発研究に適用できることが、両者の比較により明らかになった[亀井 2008]。生態人類学と「障害の社会モデル」は、いずれも対象となる人びとを資源利用と環境との関係においてとらえようとする点で、視点を共有している。その結果として、「未開」「非正常」などのネガティブなまなざしを反転させる効果をもたらすことも共通している。

「障害の社会モデル」に根ざした国際開発研究では、開発途上国における障害をもつ個人を診察するのではなく、その個人が営む日常生活における環境の中の障害要因を抽出することをねらいとしている。複雑きわまりない、しばしば事前に想定のできない環境要因を明らかにす

るにあたって、質問紙調査のみでは限界も多く、参与観察調査はきわめて有効なアプローチとなる。

2 コートジボワール現地調査の実施

このような着眼点とともに、2008年10月3～21日(19日間)、西アフリカのコートジボワール共和国アビジャン市において、障害(聴覚障害、視覚障害、肢体障害)をもつ人びとの生活と労働の実態を明らかにすることをねらいとした現地調査を行った。

これは、人類学的な要素を含む試行的調査となった。すなわち、共同研究の中で多く用いられていた統計資料収集、質問紙調査などの手法と並行して、筆者は人類学的な参与観察の手法を採り入れた。

聴覚障害の床屋、視覚障害の電話交換手、下肢障害の石けん工場設立者、下肢障害の靴修理屋など、インフォーマントたちの生活と労働の現場を訪ね歩き、それぞれの環境と資源利用の実態を明らかにした。

また、生態人類学の手法にならって、対象となる人びとを直接観察するとともに、定量的なデータを取るよう心がけた。さらに、文化、価値観、幸福感に関する語りを収集したり、行動を観察したりした(結果の詳細は[亀井 2010]で紹介したため、本論では割愛する)。

Ⅳ. 副産物としての相互作用

1 人類学が開発研究に寄与したこと

生態人類学と「障害の社会モデル」に根ざした開発研究が類似しているという認識を前提に、筆者は、第一義的には、生態人類学的な参与観察と計量的な分析手法を、障害をもつ人びとの環境利用の調査に応用することを主張するスタンスをとった(人類学から開発研究へ)。

たとえば、事故で片腕を失った女性の語りから明らかになった文化依存的な障

害、バリアの多い職場で勤務する下肢障害の男性の生活戦略など、質問紙の項目に沿った調査では抽出することが難しい、環境の中のさまざまな障害要因とそれらへの対処のしかたなどを、多く発見することができた [亀井 2010]。

「障害と開発」研究における参与観察調査の効用として、環境要因を広く見渡して調査することができること、文化的・社会的要因を抽出できること、個人の主観的幸福感を含めた理解が可能となること、相手と同じ言語を話すことによりラポールを形成し、回答のバイアスの軽減がはかれることなどが挙げられる²⁾。

一方、共同研究の中での議論においては、国際開発研究に参与観察調査を用いることの短所も指摘された。サンプルが少ないこと、時間がかかること、参与観察が許可されない国・地域では実施が困難であること、開発プロジェクトの中に文化・主観・感情が含まれることの功罪などである。このような対話を経つつも、参与観察調査の手法の意義は、国際開発の共同研究の成果として一定程度受容された。

2 開発研究が人類学に示唆したこと

一方で、筆者は、開発研究ではすでに用いられているが、人類学が十全に取り入れることができているいくつかの重要な方法と視角を見だし、それらを「人類学の側に持ち帰る」ことを意識するようになった(開発研究から人類学へ)。

とりわけ重要なポイントとして、次の二点が挙げられる。

(1) 「だれを調査するのか」: 文化相対主義が従来扱ってこなかった、身体の差異およびそれに関わる相対主義を、民族誌的研究の中に公式に導入すること

(2) 「だれが調査するのか」: ネイティブ・アンソロポロジー (自文化人類学) の振興に関連し、開発研究が進める当事者参加の調査から人類学が学ぶべきこと

(1) だれを調査するのか

開発研究では、障害をもつ人びとに対して、「開発の担い手」としての役割が期待されている。このため、調査においても、障害をもつ本人に直接アプローチすることが重視されている。

一方、人類学では、障害が民族誌の対象として含まれることがあるが、一般的には民族誌における脇役にすぎない。障害をもつ本人たちの側へと入り込む参与観察は、めったに行われてこなかった。異なる身体をもつ人びとが、マジョリティを含む当該社会の環境をどうとらえ利用しているのかが明らかにされないままとなっている。文化人類学は、今なお、自他の「身体の差異」というこれまで渡られることのなかった川を前にして、向こう側へと参与することを躊躇し続けているかのようなのである。

言語的な差異、文化的な差異を乗り越えてきた文化人類学は、「身体の差異」およびそれに関わる相対主義を、民族誌的研究の中に公式に導入することができるであろうか。この問いが、文化人類学の側に残された。

(2) だれが調査するのか

開発研究では、障害をもつ本人にアプローチし、問題発見を容易にするために、類似の障害をもつ研究者や調査員を投入することに積極的である。実際、アジア経済研究所のふたつの共同研究を組織した主査は、ろう者であった。また、この共同研究の一環として、フィリピンにおいて、障害をもつ現地調査員たちの研修と大規模な質問紙調査が実施されている。これにならい、筆者が実施したコートジボワールでの調査でも、調査を円滑に進めるために、現地のろう者の調査助手を雇用し、手話によるインタビューを行うなど、インフォーマントが回答しやすい調査環境作りに工夫をこらしていた。

一方、人類学では、このように身体的に多様な民族誌の書き手をそろえているであろうか。民族誌の対象のみならず、「人類学者の側の多様性」を確保する努力をしていると言えるであろうか。ネイティブ・アンソロポロジーの振興(桑山2008)は、言語的・文化的なネイティブに限らず、「身体条件に関する当事者」の存在も忘れるべきではないであろう。

このことは、文化人類学教育を行っている大学や、研究者コミュニティである学会が、障害をもつ学生、研究者を十分に受け入れようとしてきたかどうかという、構造的問題と関わっている可能性も指摘できる。

人類学は、いっそう「身体条件が異なる人びと」の文化と社会に対して直接アプローチし、その記述を行うことができるであろう。また、「身体条件が異なる」人類学者、民族誌の書き手の育成をすることもできるであろう。これらは、いずれも文化人類学の研究方法や対象、教育のあり方、理論的な枠組みにまで影響を及ぼしうる、重要な「帰りの手みやげ」となった。

V. おわりに：人類学の雑種性の伝統と実践志向

今日、人類学の「実践」をめぐる指向性がさかんに論じられている。また、実践のあり方も、開発(の)人類学を典型とする「調査地・調査対象集団に関する人類学的な知見の活用」にとどまらず、学校や博物館、地域社会やNPOでの関与と共働など、すそ野は広がっていると見られる。これらにおいては、人類学的方法と知見を他領域に輸出し、学术界や関連領域における人類学のプレゼンスを高め、人類学者が職域を拡大することが想定されているかもしれない。

ただし、歴史を振り返れば、文化人類学は、隣接諸領域、たとえば生態学、民

俗学、宗教学、社会学、農学などから方法、知見、人材を取り込み、その「雑種性」を長所として発展を遂げてきた。近年では、むしろその雑種性の低下を危惧する見解も見られるほどである。

近年の「実践諸領域との出会い」は、人類学の変節と見るべきではなく、むしろ人類学の「雑種性の伝統」の上にあると見ることができよう。人類学が他の領域に「与えつつもらう」ために、同時代の新しい要素を採り入れる試みがいっそう奨励されてよいはずである。

人類学者が雇われて仕事をすることも、また、多くの素材が魅力的なエスノグラフィへと還流していく好機にほかならない。民族誌をいっそう豊かにしていくためにも、人類学が隣接領域の業務を積極的に受け入れ、関与し、そこで得られた知見を民族誌の成果として還流させていくことが望まれる。

謝辞

本論は、日本貿易振興機構アジア経済研究所・共同研究「障害者の貧困削減—発途上国の障害者の生計」および「開発問題と福祉問題の相互接近—障害を中心に」(いずれも主査：森壯也氏)への参加経験の中で得た示唆をもととしている。また、第8回九州人類学研究会オータムセミナーセッション(2009年11月7日)および日本文化人類学会第44回研究大会分科会(2010年6月12日)(いずれも企画担当：伊藤泰信氏)における発表、討論に基づいている。さらに掲載にあたっては、匿名の査読者お二方から丁寧なコメントをいただいた。関係各位に感謝したい。

註

- 1) 「障害」と「障がい」のいずれの表記を採用するかについては、さまざまな見解がある。アジア経済研究所の研究会が依って立つ「障害の社会モデル」では、障害は個人

に属するのではなく個人を取り巻く社会環境の側にあると考えるため、「害」の漢字をあえて用いることに積極的な意義を見いだす論者が多い。本論もその立場を踏襲し、以下「障害」の表記を用いる。

- 2) コートジボワール共和国には 70 種類を超える民族諸語が分布しているが、植民地時代に導入されたフランス語が公用語として学校教育などで用いられている。耳の聞こえる調査協力者に対してはフランス語を、ろう者の調査協力者に対してはフランス語圏アフリカ手話を用いてインタビューなどを行った。

参考文献

亀井 伸孝

- 2006 『アフリカのろう者と手話の歴史—A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』明石書店。
- 2008 「途上国障害者の生計研究のための調査法開発—生態人類学と「障害の社会モデル」の接近」森壮也編『障害者の貧困削減—開発途上国の障害者の生計 中間報告書』日本貿易振興機構アジア経済研究所、pp. 31-47。
(<http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Project/2007/113.html>)
- 2010 「コートジボワールの障害者の生計—公務員無試験採用制度の達成と課題を中心に」森壮也編『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるのか』岩波書店、pp. 187-211。

桑山 敬己

- 2008 『ネイティヴの人類学と民俗学—知の世界システムと日本』弘文堂。

日本貿易振興機構アジア経済研究所

- 2006 「開発問題と福祉問題の相互接近—障害を中心に」
(<http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Project/2006/429.html>)
- 2008 「障害者の貧困削減：開発途上国の障害者の生計」
(<http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Project/2008/113.html>)

森 壮也 (編)

- 2008 『障害と開発—途上国の障害当事者と社会』日本貿易振興機構アジア経済研究所。
- 2010 『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるのか』岩波書店。

NOLAN, R.

- 2002 *Development Anthropology*. Westview Press. (=2007、関根久雄・玉置泰明・鈴木紀・角田宇子訳『開発人類学—基本と実践』古今書院)

NUSSBAUM, M. C.

- 2000 *Women and Human Development*, Cambridge University Press. (=2005、池本幸生・田口さつき訳『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』岩波書店)

UNITED NATIONS DEVELOPMENT PROGRAMME

- 2004 *Human Development Report 2004: Cultural Liberty in Today's Diverse World*. (=2004、横田洋三・秋月弘子監修『人間開発報告書 2004—この多様な世界で文化の自由を』国際協力出版会)
(2011年5月31日 掲載決定)